



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 資源採掘とアラスカ先住民の関係 : ダンリン金鉱山プロジェクトの事例から  |
| Author(s)        | 近藤, 祉秋  |
| Citation         | 北海道立北方民族博物館研究紀要, 34, 27-31  |
| Issue Date       | 2020-03-13  |
| Doc URL          | <a href="http://hdl.handle.net/2115/77990">http://hdl.handle.net/2115/77990</a> |
| Type             | article   |
| File Information | Relationships between Resource Extraction and Alaska Natives.pdf                |



[Instructions for use](#)

資源採掘とアラスカ先住民の関係  
ーダンリン金鉱山プロジェクトの事例からー

近藤 祉秋

北海道大学 アイヌ・先住民研究センター

**Relationships between Resource Extraction and Alaska Natives:  
A Case of Donlin Gold Project**

**Shiaki KONDO**

**Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University**

Reprinted from

**The Proceedings of the 34th International Abashiri Symposium (2020)**

(ISSN 2188-7012)

第34回北方民族文化シンポジウム網走 報告 (2020) 別刷

# 資源採掘とアラスカ先住民の関係 ーダンリン金鉱山プロジェクトの事例からー

近藤 祉秋

北海道大学 アイヌ・先住民研究センター

## Relationships between Resource Extraction and Alaska Natives: A Case of Donlin Gold Project

Shiaki KONDO

Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University

This paper aims to discuss contemporary situations and challenges regarding natural resource management and extractive industries in Kuskokwim River drainage, Alaska, U.S.A. Indigenous societies along the Kuskokwim River experienced severe decline of king salmon during the 2010s. With the effort of various stakeholders, the number of spawning king salmon seems to be increasing. However, there is another issue to be solved. Donlin Gold mine was proposed in the middle part of Kuskokwim River and is now in the process of getting permission from related agencies. If it begins its operation, the mine will be one of the biggest in the world. The gold mine may bring long-awaited opportunities for employment for locals during the 30 years of operation, but it is also possible that it may cause devastating environmental damages. In this paper, I discuss how local indigenous societies respond to this new environmental management issue.

キーワード：アサバスカン、サケ漁撈、狩猟、資源採掘

Keywords: Athabascan, Salmon Fishing, Hunting, Resource Extraction

### 1. はじめに

本稿では、米国アラスカ州クスコクイム川流域の自然資源管理に関する新しい課題として、金鉱山の開発事業を取り上げ、それに対する流域社会の対応を論じることを目的としている。州内第2位の流域面積をもつクスコクイム川流域では、下流域から中流域にかけてユピック・エスキモー、上流域にアサバスカンの人々が居住している。クスコクイム川流域の人々にとって、陸上の移動手段が限られる中で河川は水上交通の要となるのみならず、マスノスケ、ホワイトフィッシュ類をはじめとする重要な食料源を獲得するための生業活動の場でもある。そのため、流域の自然資源管理を考えるとときに先住民社会による生業の対象となる種の保全について検討する必要がある。

クスコクイム川流域では、米国とカナダの二国間にまたがる国際河川のユーコン川と同じく、2010年代にマスノスケの記録的な不漁を経験した（近藤 2016）。これは、流域の先住民社会にとって、伝統文化であり、かつ生計手段としても重要な漁撈の継続ができなくなる事態を意味しかねないため、大きな懸念をもって受け止められた。現在、サケの共同管理を目指すアラスカ先住民や当局の試みもあり、以前予断を許さない状況ではあるが、遡上数は徐々に回復の兆しを見せ始めている可能性がある。

しかし、現在、クスコクイム川流域に新たな問題が生じている。中流域でダンリン金鉱山プロジェクトが計画され、認可の手続きに入った。この金鉱山開発事業は、稼働する予定の30年間にわたって地元の先住民社会に雇用をもたらす可能性があるが、尾鉱（排石）の流出が生じた場合、広範囲にわたって環境汚染をもたらしかねない。

アラスカでは、19世紀後半から現在にかけて鉱物資源<sup>1</sup>の採掘が盛んにおこなわれてきた。19世紀末から20世紀初頭に米国アラスカ州とカナダ西部を熱狂の渦に巻き込んだゴールドラッシュはその走りと言ってよいだろう。1968年のアラスカ北部・ブルードー湾での石油発見は、アラスカ先住民権益処理法（1971年）が制定されるきっかけとなった。1988年に発表された、極北国立野生生物保護区（ANWR）における石油・天然ガス開発の計画に対しては、グイッチンの人々と環境保護団体が連携して、反対運動を組織してきた（井上 2007; 近藤 2018）。アラスカを語る上では、先住民社会と資源採掘事業がどのような関わりをもつかは重要な問いであると言える。

### 2. 北方先住民社会と資源採掘事業の関わり

北極域の他地域ではどうだろうか。例えば、グリーンランドでは、ウラン採掘に対する凍結措置が2013年に解

除された。グリーンランド自治政府は、デンマークからの（政治的、かつ経済的な）独立を目指す上での資金源として資源採掘に強い関心を抱いており、この事例は「先住民による自治」を達成する（もしくはより推進する）ために資源採掘事業が先住民政府のパートナーとして見られる場合もあることを示している（Bjorst 2016）。基幹産業の漁業が不調のなか、自治政府やグリーンランド南部の自治体は、採掘会社が約束する雇用によって「地元コミュニティを救う」可能性に賭けているように見える。しかし、地元の環境NGOなど、ウラン採掘による環境汚染を心配する声も根強い（Bjorst 2016）。

サーミの人々が多く居住するノルウェー北部のフィンマルク県では、2010年頃に金や銅の採掘事業が計画された。アークティック・ゴールド社は、カウトケイノ地域で金鉱山の操業を申請していた。地域経済は決して良い状況ではなかったにも関わらず、カウトケイノ議会は金鉱山の開発を認めない決定を下した。この地域は、人口の95%がサーミであり、トナカイ牧畜が地域の重要な産業であった。カウトケイノ地域の政治家は、基幹産業であるトナカイ牧畜に悪影響が出ることを懸念していたとされる（Nygaard 2016: 21）。

グリーンランドとノルウェーの事例を比較すると、先住民が多数派となって運営する自治体がどのように地域の将来を思い描くかによって、資源採掘に対する決定が異なることがわかる。資源採掘は大いに「クニ造り」（nation-building）の過程と関わることである。ここでは、「クニ」は、（国民）国家のことでもあり、植民者の政府に対して「国同士の関係」を求めてきた先住民の政府のことでもある。そして、このような資源採掘事業とそれを支援する自治体（グリーンランドの場合）が強い経済基盤をもった豊かな地域という将来のビジョンを繰り返し説いていることから、「クニ造り」には一信じるに値するかどうかはともあれ一言説が一役買っていることがわかる（Bjorst 2016: 40）。

ここで重要なのは、「強い経済基盤をもった豊かな地域」という事業者が語る言説はあくまでも言説に過ぎないことだ。確かに資源採掘事業は、雇用や税収といった形で地域社会に大きな経済的利益をもたらす可能性があるが、人々が懸念する環境汚染の問題以外にも、鉱物の市場価格などの不確定な要素によって経営が左右されかねない不安定さを持ち合わせている（Wilson and Stammler 2016: 2-3）。また、資源採掘事業が開始されることで大規模な人の流入があり、家賃が上昇し、一部の地域住民がホームレス化したという報告もある（Young 2016）。資源採掘が地域住民に経済的な利益をもたらすという言説自体にも十分に疑問の余地があると言える。

資源採掘をめぐる言説に着目することで見えてくるもうひとつのことは、多くの場合、資源採掘を推進する言説と対抗言説が二極化することだ。前述したグリーンランド南部の場合、ウラン採掘が「コミュニティを救うのか」、

それとも「コミュニティを破壊するのか」が争点となった。ノルウェーの石油開発では、石油採掘事業と商業漁業者の対立が激しく、「石油か、魚か？」の二択が論調となっているという（Blanchard 2013）。

### 3. ダンリン金鉱山プロジェクトと反対運動

1996年に金鉱山会社の出資により発足したダンリン金鉱山プロジェクトは、クスコクイム川中流域のダンリン川付近から産出する金を採掘対象としている。この地域に金が眠っていることはゴールドラッシュ期にあたる20世紀初頭からすでにわかっていたが、未開発のままであった。稼働予定期間は27年間であり、年間平均で約40トンの採掘が見込まれているとされる。事業の許可が下りた場合、世界最大規模の露天掘りの金鉱山となる可能性がある。2012年以降、許可申請中の状況であるが、2018年8月にはアメリカ陸軍技師団（大規模なインフラ整備や環境規制を担当する土木工学関連の連邦機関）による最終環境アセスメントも公開され、採掘を始めるのにあたり必要な手続きが進められている（Donlin Gold 2019）。

ダンリン金鉱山プロジェクトのホームページでは、この事業がクスコクイム川流域の人々が恐れる環境破壊のリスクを減らしながら、雇用を通して地元経済の強化に役立つものであると主張されている。地元配慮した事業であることを印象づけるために、職業訓練や奨学金の給付、地元のイベントへの出資、ユピック語の事業紹介動画の作成といったさまざまな取り組みがおこなわれている（Donlin Gold 2019）。実際、経営陣がどの程度まで地元住民の声に耳を傾けるつもりであるかは定かではないが、事業を成立させる上で地元住民の支持を得ているという印象が重要であるとは認識されているようだ<sup>2</sup>。

しかし、クスコクイム川流域で発行されている地元新聞『デルタ・ディカバリー』の報道を見る限り、地元住民の不安を払拭するような十分な説明がなされていないように思われる。操業開始に必要な手続きの申請が本格化した2019年冬にはダンリン金鉱山の操業への反対運動も激しさを増した。例えば、流域のアラスカ先住民女性136名は、所属するアラスカ先住民企業の経営陣に対して公開書状（2019年2月6日）を送った。彼女らは、地域経済振興の重要性を認めながらも、アラスカ先住民の伝統的な生活様式の根幹となる生態系に悪影響を与えるリスクをとまなう開発は容認するべきではないと強く述べている。また、下流域と中流域にある13か村の評議会（その村に住む先住民の意思決定機関）は、州政府がダンリン金鉱山プロジェクトに対して交付した採掘許可の差し止めを求める訴えを起している（近藤 2020）。

ダンリン金鉱山プロジェクトに対する反対運動の報道を追っていくと、尾鉱（排石）に含まれる有害物質が川を汚染し、サケの遡上に影響を与える可能性に対する懸念が強いことがわかる。クスコクイム川流域の人々

が、資源採掘がサケに悪影響を与える可能性に対して大きな懸念を持っているのはこれまでのサケ管理をめぐる状況を考えれば自然なことである。クスコクティム川流域では、地域住民の声が資源管理に反映されていないという指摘を受けて、1988年に「クスコクティム川サケ管理作業部会」（以下、「サケ作業部会」と表記する）が発足した。2010年代に大きな問題として浮上したマスノスケの記録的な不漁に際しても、サケ作業部会は地元住民が主体的にサケ管理に関与できる場として機能したと言える（近藤2016）。2018年から2019年にかけて、ダンリン金鉱山に対する認可の手続きが進んだが、これは協働してサケ管理を進めてきた流域の人々にとって、サケに対する新しい脅威<sup>3</sup>と真剣に向き合う必要が生じたことを意味した。

ダンリン金鉱山プロジェクト側も、流域の人々がサケをはじめとする魚類への悪影響に懸念を抱いているのは承知しているようだ。事業ホームページの中で「魚類の保全計画」という項目を設けて、金鉱山予定地の近くで生息する魚類に関する研究や川の水質モニタリングをおこなって、クスコクティム川の水と魚類を保全しようとする姿勢をアピールしている（Donlin Gold 2019）。

#### 4. パイプラインに対する懸念と期待

次に、ダンリン金鉱山をめぐる議論の中であまり注目されてこなかったパイプラインに関する上流域の人々の懸念を論じたい。ダンリン金鉱山プロジェクトは道路交通網や送電網が十分に整備されていない地域で計画されている。そのため、採掘に必要な電力を確保するための手段が必要となる。発電用の燃料を運ぶためにはクスコクティム川を使った輸送も検討されたようだが、輸送船に事故が起きた場合、河川の汚染という人々が最も恐れる事態につながりかねない。代わりに、アンカレジからアラスカ山脈経由で採掘場に燃料用の天然ガスを運ぶパイプラインの敷設が計画されている。このパイプラインは、アラスカ山脈の北側にあるフェアウェル付近を通過する。このあたりはクスコクティム川上流域にすむディチナニクの人々が伝統的生活圏としてきた場所であり、ドールシープ、カリブーの繁殖地となっている。ディチナニクの人々が多く住むニコライ村（推定人口88名、2018年現在）では、伝統的な猟場がパイプラインの敷設によって悪影響を受ける可能性について強い懸念を持っている。

ダンリン金鉱山に関して、ニコライ村の人々はかなり複雑な思いを抱いているように思われる。2019年2月末にニコライ村を訪問した際、ダンリン金鉱山プロジェクトに関する『デルタ・ディスカバリー』の記事や読者投書欄の切り抜きが村役場の建物内にある掲示板に貼られ、環境汚染に対する懸念の部分が蛍光ペンで強調されていた（図1）。それ以前の時期でも、アラスカ先住民の代表者が集まる会合でこの話題が出ると、環境アセスメントを担当したアメリカ陸軍技師団の担当者に対して、ニコ

ライ村の人々はパイプラインによる猟場への悪影響を含むさまざまな懸念を表明してきた。他方で、ダンリン金鉱山プロジェクトが村のイベントに資金援助をおこなった際には、実施報告と感謝のメッセージを伝えるための写真が撮られていた（図2）し、村の古老がダンリン金鉱山のホームページに掲載されている人材募集の情報を見て、子どもたちの将来の就職先としてダンリン金鉱山での仕事を視野に入れる必要があると村学校の会議で述べたのを耳にしたこともあった。



図1. ニコライ村の掲示板に貼られた新聞の切り抜き



図2. 出資者への感謝を記したボードを持つ子どもたち

ニコライ村では、2019年2月27日にダンリン金鉱山プロジェクトに関する公聴会が開催された。その際、改めて人々の複雑な思いに接することとなった。この会合は1時間に満たないものであったが、ニコライ村の村人30名弱とダンリン金鉱山プロジェクト社員や州政府の担当者など8名が参加した。この公聴会において、サケへの影響を心配する声やフェアウェル付近に先祖が埋葬されているから荒さないでほしいという意見が表明されたが、議論の焦点はパイプラインが村にとってどのような意味を持つかであった。現在、フェアウェル付近をもっとも頻繁に利用するのは、スポーツハンターを顧客とする狩猟ガイド業を営む一家である。このガイド業を始めたのはディチナニクの猟師であったが、現在では、創始

者の義理の息子にあたるヨーロッパ系アメリカ人の年長男性が経営者となっている。この男性は現在パイプラインの敷設が検討されている場所から数マイル移動させるだけで狩猟獣に対する悪影響はかなり減少されるはずなので、パイプラインの建設予定地域の変更を検討するように依頼していた。

パイプラインの位置づけをめぐるもうひとつの重要な論点は、その保守点検を誰が担うことになるのかであった。上記の男性は、パイプラインの建設が避けられないのであれば、その保守点検を地元民が担うことにできないかと打診した。これに呼応するようにして、あるディチナニクの男性が定期的に流域の水質モニタリングをするために地元民を雇用してほしいと要望を述べた。パイプラインは、サケや狩猟獣といったニコライ村の人々にとって重要な意味を持つ生物種の生存に対する脅威であるともなされる一方で、保守点検やモニタリングを通して貴重な現金収入をもたらす可能性を秘めたものでもある。生業の機械化が進んだ現在では、ガソリン、モーターボート、スノーモービル、ライフルなどを揃えるためには現金収入が必須であり、これらを用立てることができない限り、狩猟や漁撈に赴くことができない。資源採掘による生態系への悪影響を深く懸念する人々がパイプラインの敷設を前提としているかのような発言をする背景には、上記のような経済的状況がある。

ダンリン金鉱山プロジェクトが敷設するパイプラインの事例から改めてわかるのは、資源採掘事業が環境汚染を招く可能性を十分に承知しながらも混合経済に生きる中でどうしても雇用を確保する必要があると考える人が一定数いることだ。また、公聴会での議論の流れではあるが、ディチナニクの男性が鉱山での仕事<sup>4</sup>ではなく、水質モニタリングの仕事を地元民が請け負うことを求めたことは興味深い。資源採掘が雇用をもたらすという言説が往々にして無視しているのは、地元住民が望むような雇用の機会が提供されるかという点である (cf. Hansen et al. 2016: 28)。ディチナニク人の男性と一部の女性 (およびニコライ村に長年在住しているJ氏のような非先住民) にとって、伝統的生活圏もしくはその付近での野外活動をともなう仕事は人気が高い。そのため、パイプラインの保守点検や水質モニタリングの仕事を実際に村人が請け負うことになった場合には多くの村人が応募することが予想される。

## 5. おわりに

ここまでダンリン金鉱山プロジェクトを事例としながら、アラスカ先住民社会と資源採掘事業の関わりについて論じてきた。まず指摘できるのは、これがクスクイム川流域全体での問題であることだ。金鉱山の予定地は川の中流域であるが、流域の人々の関心がサケの保全を進めることにあるため、問題はサケが遡上する流域全体

にまで拡大せざるを得ない。さらに重要なのは、資源採掘による潜在的な利益と被害の分配が川の流れによって左右されていることだ。ダンリン金鉱山に近い中流域の人々は、鉱山関連の雇用の機会が相対的に得やすいと考えられるが、ベッセルを中心とする下流域やニコライ村を含む上流域にまで雇用の機会がもたらされるかどうかは不明確である。しかし、廃石に含まれる有害物質が川に流出するような事態が生じる際には、サケが遡上する下流域から上流域にかけてのすべての地域に被害が及ぶ可能性が高い。

とはいえ、金鉱山事業がもたらす影響を考える上で、サケや川だけに着目するのでは不十分である。ニコライ村での公聴会からわかるのは、上流域の人々はサケの遡上に関する懸念を下流域の人々と共有しているとは言えるが、彼らにとって問題の核心はパイプラインとどう付き合うかということにあることだ。新聞報道を見てもサケと川の管理に対する脅威という見方は大きく取り上げられる一方で、パイプラインに関してはあまり言及されていないように思われる。資源採掘をめぐる言説は二極化しやすいことをすでに指摘したが、「金か、魚か?」という問題設定は間違いであるとは言えないが、上流域の関心を捨象してしまっている点でミスリーディングであると言える。

本稿の事例は、資源採掘をめぐる二極化する言説の中で見落とされやすい別の関心を現地調査に基づいて拾いあげた点で、先住民社会と資源採掘事業の関係に関する文化人類学的研究に対して貢献するものであると考えられる。先行研究では、資源採掘事業に最も近いコミュニティが調査対象となることが多かったが (cf. Bjørst 2016)、事業予定地から遠く離れた場所においても人々の懸念が高まっている可能性を考慮して調査を進める必要がある。

## 謝辞

本稿は、JSPS科学研究費補助金 (19H00565)、日英研究協力グラント (ES/S013806/1)、北極域研究推進プロジェクト (テーマ7) の成果の一部である。

## 注

- 1 本稿では、金、ウランウムなどの他、石油・天然ガスも含めて「鉱物資源」と表現する。
- 2 近年、資源採掘に関する社会科学研究では、政府や地権者が与える操業許可とは別に、地元住民などの利害関係者を含む「社会による操業許可」(Social License to Operate、略称SLO) が論じられるようになってきた (Wilson 2016)。資源採掘の事業者もこうした動向を完全に無視することはできない状況にある。
- 3 前述したように、ダンリン金鉱山プロジェクトが発足したのは1996年であるが、採掘開始のために必要な手続きが進んだ2018年～2019年以降、事業が実際に開始される見込みが一気に高まったと言える。

4 しかし、ニコライ村の人々の中には近隣で稼働していたニクソンフォーク金鉱山で労働者として働いた経験を持つものも少なくない。

#### 引用文献

井上敏昭

2007 「『我々はカリブーの民である』—アラスカ・カナダ先住民のアイデンティティと開発運動」 煎本孝・山田孝子編『北の民の人類学—強国に生きる民族性と帰属性』 pp.95-122、京都大学学術出版会：京都

近藤祉秋

2016 「アラスカ・サケ減少問題における知識生産の民族誌—研究者はいかに関わるべきか—」 『年報人類学研究』 6: 78-103

2018 「『アラスカ物語』の後で：グイッチン社会の狩猟をめぐる文化復興・政治・文学」 北海道立北方民族博物館編『North to the Future: 日本人が出会ったアラスカ』 pp.40-45、北海道立北方民族博物館：網走

2020 「先住民とモニタリング」 田畑伸一郎・後藤正憲編『北極の人間と社会』 pp.151-181、北海道大学出版会：札幌

Bjørst, Lill Rastad

2016 Saving or destroying the local community? Conflicting spatial storylines in the Greenlandic debate on uranium. *The Extractive Industries and Society* 3: 34-40.

Blanchard, Anne

2013 'Oil versus fish' in Northern Norway: Perspectives of the market, the law and the citizen. In Röcklinsberg, Helena and Per Sandin (eds) *The*

*Ethics of consumption: The citizen, the market and the law*. Pp. 94-99. Wageningen Academic Publishers: Wageningen.

Dolin Gold

2019 Donlin Gold website <https://www.donlingold.com/> (Last checked on December 14th, 2019)

Hansen, Anne Merrild, Frank Vanclay, Peter Croal, and Anna-Sofie Hurup Skjervedal

2016 Managing the social impacts of the rapidly-expanding extractive industries in Greenland. *The Extractive Industries and Society* 3: 25-33.

Nygaard, Vigdis

2016 Do indigenous interests have a say in planning of new mining projects? Experiences from Finnmark, Norway. *The Extractive Industries and Society* 3: 17-24.

Wilson, Emma

2016 What is the social license to operate? Local perceptions of oil and gas projects in Russia's Komi Republic and Sakhalin Island. *The Extractive Industries and Society* 3: 73-81.

Wilson, Emma and Florian Stammer

2016 Beyond extractivism and alternative cosmologies: Arctic communities and extractive industries in uncertain times. *The Extractive Industries and Society* 3: 1-8.

Young, Michael G.

2016 Help wanted: A call for the non-profit sector to increase services for hard-to-house persons with concurrent disorders in the Western Canadian Arctic. *The Extractive Industries and Society* 3: 41-49.